



菅波 茂

療現場を体験すること
で、医療人としての使命感を養うためのお役に立てれば本望である。

8月21日、AMDAは

高知大医学部と協定を結んだ。AMDAグループ代表の私と脇口宏医学部長（小児科教授）が署名した。主な内容は三つ。

一つは人材育成プログラム。二つ目は、AMDAがネパールで運営している「母と子の病院」に高知大が誇る周産期医療プログラムを導入すること。最後が、世界で災害被災者支援を行っているAMDA多国籍医師団への参加である。

詳細を説明したい。人材育成プログラムには、私の信頼する各国の支部長がお手伝いできる。AMDAインターナショナルの国際医療ネットワークを活用してもらいたい。日本の次世代医療を担う人たちが、世界の医

ネパールの「母と子の病院」は、この11月で開院11年になる。ベッド数は109床。年間の出産は2600件以上(08年)

ある。医療機能が過度に集中している首都カトマンズ以外で、小規模ながら小児の専門医療と周産期医療体制の両方を兼ね備えた唯一の病院だ。そこで働く医師の博士課程への受け入れ、技術指導スタッフの派遣、そしてIT技術を利用したテレビ会議などを活用した高知大ならではの支援を期待している。

さらに、21世紀は「災害の世紀」と言われている。「救える命があればどこへでも」のスローガンのもとに、高知大のスタッフが他国の医師たちと災害被災者の救援に参

高知大医学部との協定

加することは、新たな視点と見識を持てる良い機会になると確信している。

協定は脇口医学部長と個人の信頼関係があればこそ話だった。71年にAMDAの源流となる第一次岡山大学医学部クワイ河踏査隊と一緒に立ち上げ、台湾、タイ、インド、そしてネパールをまわった。タイではクワイ河上流にあるモン族の開拓農場で寄生虫調査を実施した。インドのアグラでは日本の財団が設立したハンセン病のセンターを視察した。彼は1年目の医師であり、私は医学部最終学年だった。顧みれば、38年間の人間関係である。

08年にAMDA高知クラブが発足した。クラブ長の高杉尚志助教が自費でネパールを訪問。専門的視点から「母と子の病院」を視察し、協定の礎を作ってくれた。彼の熱意なくして今回の協定は不可能だったと言えよう。もし、「AMDA医科大学構想」が実現すれば、付属病院としての機能を果たすことになる。

今回の協定に基づいた高知大による周産期医療への技術支援は、当病院の発展にとって不可欠な事業である。「なくてはみんなが困る」公共性の高い医療施設として、今後とも皆様方の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。

06年11月、彼が主催した日本小児感染症学会で「小児感染症と国際貢献——こどもはおとなの希望」のテーマで講演したのが契機となり、特に、兵庫県支部の人

連続だった。AMDA本部、ネパール支部、そして兵庫県支部の支援体制で単年度黒字を出せることまで成長してきた。機構が兵庫県支部と協力して運営支援を行っている。